平成 16 年 7 月 10 日
＜4953　佐々木　朗＞

ビデオレター奮闘記

１．大学院までの道のり

現職の私が大学院に行くためには、道教委の派遣という形を取るしかない。学生でありながら給料をもらえるのである。また、そうでなければ家族５人がやっていけないのであるが。大学院で情報のことを勉強したいと思ったのはだいぶ前からではあった。実現はまず無理だと思っていたし、またこんなに早く夢が実現するとは、思っても見なかった。今でもホッペをつねってみるような気分である。

毎年６月末に大学院派遣の案内が教育委員会経由で学校に届きく。私は昨年に続き２年目の挑戦である。大学院に派遣になるためには、３つの関門がある。一つ目は渡島教育局の面接がある。そこで教育局ごとに人数が絞られる。そして二つ目は、北海道教育委員会の論文試験と面接試験。１時半以内で 1200 文字の論文、そして午後から一人 20 分程度の面接試験がある。これが一番たいへんかもしれない。昨年の夏休みは毎日論文練習で、校長先生に添削してもらっていた。そして、三つ目が、大学院の入試試験。こちらは落ちることがないということ(？)で、いく分気楽ではあったが、過去問題数年分を勉強した程度であった。

こうして、今、今年一年ここで勉強しているわけである。

２．ビデオレター作りのきっかけ

昨年初めて、大学院説明会に参加した。その時は、あくまでも「夢」であった。もしやが１％でまさかが９９％っていうところである。それでも、大学院の目的な学生生活、そして何よりも先輩からの励ましが、大学院進学の気持ちを高めることになった。

その一方、「授業はどんな内容だろう。どんな形式なのだろう。」という疑問もあった。夢がかなって、今度は自分がこれから来るであろう後輩達の誘う立場になり、何か私が疑問に思ったことを伝える術がないだろうかと思い、ビデオレターを思いついた。

私は、ビデオレターには授業の様子以外にもう一つ取り込もうと思ったことがあった。それは先輩からのメッセージである。現職で、また院に通いながら一生懸命がんばっている先輩の姿を映像を通して後輩達に伝え、熱意のある学生がやってきてほしいと思ったからである。

３．ビデオレター製作へ

(1)許諾

まず、私の指導教官の山崎先生にお話し了解をもらって、学校教育専修の羽根田先生にプランを文書化して思いを伝えた。羽根田先生は私の思いを組んでくれ、大学の会議にかけてくれた。待つこと約２週間。そろそろ取りかかるか諦めるかと私が迷い始めていた時に、羽根田先生から GO サインの連絡をもらった。

(2)撮影のアポ

編集を考えると猶予は１週間少し。ここからが大変であった。できるだけ各教科にまたがるように授業の撮影の許可を求めに、プランの文書を持って先生方の研究室を回った。ところが、なかなか会えないのである。10 回ぐらい足を運んでやっと会えた先生もいた。会えただけで感激という具合である。それでも全ての先生が撮影には協力的であった。

また、熱く語る先輩は、私の頭の中では院生は美術の志田さんと音楽の三笠さんに決まっていた。志田さんとは遠藤先生の教育心理学Ⅱで授業が同じで、絵について口数少なくも情熱的に語る姿に感銘を受けていた。また三笠さんとは、教育工学の集中講義でたまたま一緒になり、吹奏楽指導に中学校を駆け巡る話を聞き、またその時いただいた吹奏楽定期演奏会に行き、彼のサックスを吹く姿を見て、「彼だ」と決めていた。一方、現職は、M2 で今的場で教鞭をとっている長浦先生が頭にあった。長浦先生とは、それまでお会いしたことはなかったが、HP を通して学級の生徒また過年度卒業生と交流しているなどを知っていたので数年前に、私の強引さで渡島情報教育研究会の研究紀要に原稿を執筆してもらったという経緯がある。そして、藤城の私の同僚の土田先生。ファイトがあり、勉強家であり、真剣に子どもたちに向かっている姿を見て、私の尊敬している先生でもある。「案ずるより生むが易し」という言葉があるが、どうやって説得して、了解にこぎつけるかと思いきや皆さん、照れながらも快く一発 OK してくれた。

編集のことを考えると時間が迫っていたこともあり、ここまでのアポを取るのに一ヶ月分位のエネルギーを使った気分である。

撮影は、比較的スムーズに行うことができた。最初の撮影は体育の佐藤先生。頭の中にはいろんな構想はあるが、実際にテープを回すのはどこをどう撮ったらいいのか試行錯誤ではあったが、先生の様子、そして学生の話し合いの様子を入れてできるだけ授業全体がわかるような素材を集めるようにした。こうして１つの授業にだいたい 10 分ぐらいずつお邪魔して、素材を集めていった。志田さんは、彼の研究室で、彼の学部の卒業作品を前に語ってもらい、三笠さんは、特別に吹奏楽の授業に参加してもらい、サックスの演奏を、そして指揮までも振ってもらうサービスまでしていただいた。また藤城小、的場中に出かけ、授業の様子も撮影することができた。

(3)編集

思ったより勢いでできてしまったのが編集。山口先生に先生がお使いのビデオ編集ソフトを紹介していただき、手取り足取り指導いただきました。その後、一晩格闘しましたが、既知概念が邪魔をしたのか結局ものにならず。以前に使ったことのあるムービーメーカー

を使うことにした。山口先生せっかく指導くださったのにゴメンなさいである。

こういったビデオをやろうと思った背景には、一度ビデオ編集をしたことがあるからである。ビデオ編集は昨年の渡島情報教育研究会主催の夏期実技講習会に参加したのが始まりである。それできっかけをつかみ、今年の冬、道立教育研究所のデジタルコンテンツ作成委員を受け、授業公開のためのデジタルコンテンツを製作して、何とかビデオ編集ができるようになったのである。その昔、私が初めてビデオ編集をした時は、２台のビデオデッキを並べてやったものである。今は、素材の画像を全てコンピュータに取り込み、マウス一つで、場面のカット、つなぎ、重ね、テロップ、字幕、サウンドなどを全ての作業を行うことができるのである。

ということで、次の日、一晩かけて、何とかおよそ 10 分程度にまとめることができた。やりだしたら「これで完成」というものはない。一応はできたものの、ここをもう少しこうするとか、いろいろ思いついてくる。やっぱり最初は大学の正門、そして校舎かなあと思い（これはオープニングに取り入れた)、最後には出演者を入れよう（これもやってみるとなかなかすてき)、歌も入れようか（著作権にひっかからないように学生歌「若い樹」を入れたが、学生はほとんど知らなかった）などと、楽しみながら工夫を重ねていった。

だいたいできたので承諾いただいた先生方に見てもらおうと青木先生に仮にということで WEB 上に動画を置いてもらった 38 メガぐらいの大きさである。WEB 上に置くというのは実に便利である。一人一人の先生に CD に焼いて配らなくてもいいのである。すぐに反応があった。励ましのメール、名前の間違いなどご指摘をいただいた。山口先生から、「話した言葉にテロップを入れた方がわかりやすいね。」というご指導をいただき、「ぎゃー、そりゃー大変だー。」と思いながらも、編集が予定より早くほぼ終わったので、それも取り入れた。実はデジタルコンテンツを作る時も周りのノイズが大きくて言葉が聞き取りにくい